岩見沢東高等学校　男子テニス部通信　　２０１４．５．１２．

Ganto Tennis

第４６号

文責：佐々木雄介

《　校内戦　２０１４．５．１０．１１．》

個人戦シングルス選手決め（残り２枠）　【　三分一・水上・今村・門田・**堤・小川**　】

	堤	小　川	本　田	真　所	勝　敗	得失 game	順　位
堤		６○３	４●６	６○２	２－１	＋５	1
小 川	３●６		６○３	７○５	２－１	＋２	2
本 田	６○４	３●６		４●６	１－２	－３	3
真 所	２●６	５●７	６○４		１－２	－４	4

個人戦ダブルス選手決め（残り１枠）　　伊藤７（６）６小山

【水上・三分一　今村・門田　堤・本田　小川・北池　海老江・佐藤　真所・**伊藤**】

そのほかのシングルス

海老江７－５佐藤　　水上６－１北池　　今村６－３門田　　水上６－６今村

校内で、それも５～８番手を決定するようなレベルで、これほど緊張感のある試合が行われることは、顧問としての長い経験の中でも滅多にないことである。すべてナイスゲームだった。そして、ダブルスの選手を決める小山・伊藤の対戦は、タイブレークの末に伊藤がものにした。２人ともこんなに強かったかなあ・・・・・。それ以外に行われた試合も、必死さや勝利への執念が伝わってくる集中したプレーが目立った。このチームになってからの校内の試合で、私が部員をこんなに褒(ほ)めるのは初めてかもしれない。

いくら褒められても、小山、本田、真所は、一つ一つのプレーに関して、自分では全く納得できていないのだと思う。いい試合ではなかったと思っているに違いない。しかし、何ヶ月か後、今日の負けの本当の価値が小さなものではなかったことに必ず気がづくはずである。私の目には、一人一人の目を見張る成長の跡が、既に歴然としているのだから。

mentality(メンタリティ)・・・・この言葉は聞き飽きただろうか。しかし、skill(スキル)（技術や知識）、physical(フィジカル)（身体能力・体力）に優れたプレーヤーが必ずしも勝つわけではないことを目(ま)の当たりにしたとき、私たちは“mentality”という言葉によってしかその理由を説明できないのだ。

１試合の経験で手にした悔しさや自信という「産物」が、プレーヤーを見違えるほど成長させることがある。しかし、一度のナイスゲームで skill や physical が長足の進歩を遂げるはずがない。skill も physical も、誠実で地道な努力の営みの中で、目に見えない速さで一歩ずつ培われるものだからである。では、そのナイスゲームは、プレーヤーの何を成長させたのだろうか。その伸びしろのすべてが“mentality”にあるのだ。

誰かが“真所効果”と言った。言い得て妙(みょう)である。シングルスをプレーする skill だけで比較すれば、恐らく彼はチームで５番手なのだ。しかし、転校生として突然目の前に現れた後輩のプレーに、堤も小川も、そして今村や門田までもが危機感を持った。彼が北見から携えてきた土産物が、図(はか)らずも先輩たちの mentality を鍛えてしまったのだ。そしてその土産物は、回り回って、今、真所自身を鍛えてくれているところである。